

令和 2・3 年度学校防災推進協力校 研究最終報告書

校 名 静岡県立沼津商業高等学校

校長氏名 吉 原 隆

1 研究主題

ジュニア防災士全生徒取得の取組と地域（清水町）と連携したより実践的な危機管理マニュアルの作成と検証

2 学校の実態（教員数、学級数、児童生徒数、学校・地域の特色等）

本校は明治32年（1899年）に沼津町三枚橋蓮光寺に開校、大正10年に沼津市丸子に移転昭和42年に駿東郡清水町徳倉に移転された創立123年の単独商業高校であり、東部地区の商業教育の拠点校である。現在、総合ビジネス科3クラスと情報ビジネス科2クラスが設置され、生徒数は540人、教職員数は59人（校医・薬剤師を除く）である。

学校は静岡県東部、伊豆半島の付け根に位置し、西側には標高182mの横山と256mの徳倉山に囲まれ、東側には住宅地を挟み、一級河川である狩野川が流れている。標高は17.3mあり、津波による被害は想定されていないが、大雨又は局地的豪雨による災害、台風接近又は上陸による暴風雨災害、これらによる内水氾濫による浸水被害が予想されている。また、校舎の隣地が土砂災害特別警戒区域の急傾斜地の崩壊地区に指定されており、多くの生徒の通学路が浸水被害、または横山トンネルを通り沼津市街に向かう際は、津波の浸水被害を受けると考えられる。

地域の特徴として、清水町徳倉地区は、昼間は沼津市や三島市に働きに出ている世帯が多い。そのために大きな災害が発生し、水害などにより、内水氾濫や急傾斜地が崩落した場合は、本校が避難所になっている関係で、多くの住民が避難してくる。高校生が避難場で大きな役割を果たすことが期待されると予測される。

3 研究経過

(1) 研究の全体計画

上記のような環境において、生徒は在校時だけでなく登下校時にも、自ら考えて行動することや、南海トラフ地震や台風等の風水害から自分の命を守ることができ、大切な人の命を守るための行動が求められる。そのため、地域の防災リーダーとして積極的に防災活動に参加できる資質を育成するために、「ふじのくにジュニア防災士」を全生徒が取得する取組を2年間かけて実施し、全校生徒が取得した。また、清水町と連携した

地域防災に取り組むために、危機管理マニュアルを見直すこと、学校避難確保計画を策定すること。そして生徒地区会の活性化をどのように図り、教職員と生徒と一緒に防災を考え、行動していくかについて研究を行った。

(2) 研究組織

総務課防災担当を中心に、防災訓練やふじのくにジュニア防災士の意識啓発コース及び知識行動コースの企画・運営を行い、防災教育を推進している。また清水町との連絡・調整は教頭が中心となって行っている。

(3) 1年次の研究の内容・成果等

<研究の内容>

① 地区別避難方法調査票の回収 令和2年4月9日

- ・地区別に一緒に帰る生徒の確定
- ・帰宅ルートの確定
- ・避難場所の確認（自宅・通学途中・保護者の昼の居場所）

② 防災教育推進のための連絡会議 令和2年7月28日

本校が清水町徳倉地区の避難所となっており、住民の方が徳倉地区の各避難場所から沼津商業高校までどのように移動するかの確認と、避難所の開設手順の確認、避難所開設における新型コロナウイルス感染症対策についての説明が清水町から自主防災の委員にあった。学校に避難される方は、自宅が崩壊したり、避難を余儀なくされた方のみであり、地域住民全員が避難するわけではないことを確認した。また学校からは、施設等の開放計画を説明したが、避難する際に、現在使おうと考えている、東側の学校入り口は、土砂災害崩落の危険がありそれを回避するとなると、だいぶ遠回りしないとならないとの意見が出された。これら点については今後清水町と協議をしていく必要があると考える。

③ 「ふじのくにジュニア防災士（知識行動コース）」の実施 令和2年8月7日

1年生から3年生の希望者55人が参加。

静岡県東部危機管理局小林宏教主査から、地震・津波についての災害基礎を学び災害対応カードゲーム「クロスロード」を体験し災害時の行動について理解を深めた。地震や津波の発生する仕組みや避難所での高校生の役割などを5、6人のグループに分かれ、ゲームを通じて災害時の判断を考え、生徒同士で意見交換をして情報共有を図った。

生徒の感想からは、「災害時に高校生ができることをよく考え、私たちが地域防災への参加を促せるようにしていきたい。自分の住んでいる地域は高齢者が多いので、災害時には高校生世代の力で、高齢者をカバーし、できることを手伝いたい」などが聞かれた。



④ 土砂災害・火災避難訓練 令和2年8月26日

土砂災害・火災等の緊急災害時において、生徒が「押さず・慌てず・喋らずに」を合言葉に、全員が安全な場所へ避難できるようにすること、土砂災害・火災発生時における迅速な避難実施と避難経路の確認及び人員点呼を目的に実施した。

想定としては、部活動時、大雨により清水町から土砂災害警戒情報が発表されたとの想定で訓練を行い、土砂災害特別警戒区域の急傾斜地に面する場所を使用している部活動（1～3年生）の生徒が、事前・事後に鍵の開閉、部員の人員点呼を行い、避難放送発令後速やかに2棟へ部活動顧問が誘導した。この訓練は今年度初めて行い、火災・地震だけではなく大雨時に土砂災害避難も必要であることを、教職員と生徒に認知させることができた。

また、食堂にて火災が発生したとの想定で避難訓練を実施した。HR担任は緊急避難放送終了後、避難経路を指示し、生徒を速やかにグラウンド避難させ、整列・点呼を実施した。その後地区ごとに並び替え、避難確認を行った。

火災時の避難する際の注意事項（煙を吸わない、口元はハンカチで抑える。低い姿勢であわてず、押さず、静かに避難する）を再確認できた

⑤ 緊急地震速報の訓練実施 令和2年11月5日

生徒への事前連絡せずに、訓練用緊急地震速報を活用した安全確保行動を実施し、内容としては、緊急放送に従って、机等の下へ避難し、天井からの落下物を避ける。体育館等避難するものがない場所では、姿勢を低くし、頭を手で覆い、揺れがおさまるまで動かない。（あわてて外に飛び出さない。）グラウンド等の授業では、建物・塀や壁・木から離れ、揺れがおさまるまで動かない。上記の点について注意をさせ、突発的な地震に対する行動の確認を行った。

⑥ 「ふじのくにジュニア防災士養成講座」意識啓発（シルバー）コースの実施

令和2年 12月 14日

静岡県東部危機管理課小林宏教主査と静岡県教育委員会健康体育課危機管理・安全班榎本行秀主査をお招きして、意識啓発コースを実施した。防災講話や語り部動画を見ながら、災害時自分の命を守るために、どのような行動をすればよいのか、地域からはどのようなことが期待されているかなどを考えることができた。その後1年生と2・3年生に分かれ、「災害イメージトレーニング」を実施した。

全生徒がレポートを提出し、認定証の発行を受けた。



⑦ 危機管理マニュアルの見直し

本校では、防災計画と危機管理マニュアルの2冊が存在している。令和2年3月31日教健第975号にて、南海トラフ地震情報発表時の学校の対応及び「学校の危機管理マニュアル作成の手引き（災害安全）」策定について、危機管理マニュアルの見直しとより実践的な危機管理マニュアルの策定が示されている。現在来年度4月に向けて新たな危機管理マニュアルを策定中である。また、今年度清水町と協議の上「避難確保計画」を策定した。こちらも、来年度提出に向けて再度内容を精査しているところである。

(4) 2年次の研究の内容等

① 生徒地区会の活用（4月・10月）

<令和3年4月8日 第1回生徒地区会>

- ・生徒地区役員選出、各地区生徒人数・住所・HRNOの確認を行う。
- ・「地区別避難方法調査票1（別紙1）」を利用しながら、「学校にいるときに災害（震度6強の地震・警戒宣言・10mの津波、大雨で浸水被害等）が起こり、公共交通機関がストップした際、あなたは自力で帰ることができますか？」の質問から、帰宅不能生徒の洗い出しと、迎えに来る人等の確認、帰宅可能生徒には個人で帰宅させず、集団下校の実施に向けたグルーピングを行い、地区ごとにデータを保管した。ただ、帰宅グループが仲の良い友達になってしまい、下校ルートとは関係のないグループになっていたため、10月に生徒地区会で再度確認をする。

帰宅困難者の人数 31人(男子13人・女子18人)

帰宅困難者の校内での待機（避難場所）の確定

（女子）丸子の杜2階2部屋 （男子）選択F教室

<令和3年10月8日 第2回生徒地区会>

・帰宅グループの名簿確認

第1回の帰宅グループの設定に課題があったため、総務課職員が、地区ごとに地図上に生徒住所をプロットし、グルーピングを行った。また、帰宅困難者の人数が31人と想定より少なかったため、「公共交通機関がストップした際」という文言を強調し、より生徒や保護者が避難想定できるようにした。

・学校から家に帰るまでの危険個所を特定し、避難場所を考える。

帰宅途中に大規模地震及び大津波警報ゲリラ豪雨による洪水・氾濫が起きた時にどこに避難するかを想定する（命を守る行動を考える）

帰宅困難者の人数 54人(男子10人・女子44人)。

② ジュニア防災士講座の活用（7月・12月）

<令和3年7月26日 知識行動コース（ゴールド）の実施>

昨年度と同様に希望者を募り、知識行動コース（ゴールド）の取得に努めた。今年度も44人の生徒が意欲的に講座に参加した。本校では毎年このコースへの取得に努めており、現在全校生徒540人中127人（23.5%）が取得し、在校中だけではなく、卒業後も地域の防災リーダーになれるよう人材育成を行っている。



<参考> 令和3年度 44人 令和2年度 55人

令和元年度 39人 **在校生 127人が取得**

<令和3年12月14日 意識啓発コース（シルバーコース）の実施>

静岡県東部危機管理課小林宏教主査を講師にお招きして、意識啓発コースを1年生152人が実施した。防災講話や災害イメージトレーニングを行いながら、災害時、自分の命を守るために、どのような行動をすればよいのか、地域からはどのようなことが期待されているかなどを考えることができた。昨年度は2・3年生が同講座を受講しているため、全校生徒がふじのくにジュニア防災士の認定を受けることができた。



③ 地域との連携を推進

知識行動コース修了者を中心に、地域との連携を推進し、発災時に地域の一員として高校生が自信をもって防災活動に参加できるよう、果たすべき役割について相互理解を深めたかったが、8月下旬から9月上旬に行われた総合防災訓練及び、12月に実施

される地域防災訓練が新型コロナウイルス感染防止のため、中止及び規模縮小となってしまう、思うような参加ができなかった。本校での防災教育が生徒によって地域貢献される一つの場面と位置付けていたが、とても残念な結果となってしまった。次年度以降も学んだことをどう地域に活かしていくかの視点で取り組んできたい。

④ 防災訓練の実施（8月・11月・12月）

<令和3年8月30日実施 土砂災害・火災避難訓練>

本校の西側及び北側に隣接する山地は、清水町の土砂災害警戒区域となっており、大雨や地震の際は発災する恐れがある。また本校は管理棟西側に食堂があり、授業で火災が起こる可能性がある建物が北側にあるため、効果的な避難経路の確認が必須である。火災等の緊急災害時において、生徒が「押さず・慌てず・喋らず」全員が安全な場所へ避難できるようにし、土砂災害・火災発生時における迅速な避難実施と避難経路の確認及び人員点呼を行った。また駿東消防本部への通報訓練も同時に行い、有事の際の連絡方法等の確認を行った。



<令和3年11月11日 緊急地震速報の実施訓練>

不時に発生する地震災害を想定し、授業中に緊急放送を流し、各教室で、自分の命は自分で守る。発災時に教職員がとるべき行動（命を守る指示、避難口の確保（扉を開けるなど）の確認を行った。

<令和3年12月14日実施・火災（消火体験・煙体験）及び校舎に取り残された場合の避難訓練>

不時に発生する災害において、人的災害を最小限に食い止める訓練を行うとともに、防災意識の高揚を図ることを目的として実施した。



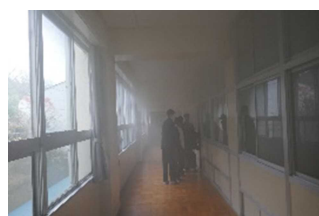
1年生 ふじのくにジュニア防災士

養成講座意識啓発コース

2年生 煙体験訓練

救助袋降下体験訓練

3年生 水消火器訓練



を実施し、駿東伊豆消防本部の御協力をいただきながら実施した。訓練を通じて、「自分の身は自分で守る」ということを改めて意識し、防災用品の使用方法も理解することができた。

<令和3年11月8日 緊急時救助袋に関する研修会>

12月に実施する、2年生の救助袋降下体験訓練の実施に際しては、11月に教職員と生徒地区会の生徒を対象に、清水町消防署の指導の下、教職員で救助袋を設置し、避難誘導を行った。この救助袋を利用する際は、災害が発生したときで、そのような場合いち早く生徒を安全な場所に避難させる必要がある。消防署の方や避難袋を設置した業者を待たず、生徒を避難させるためには、教職員が避難方法を習得していく必要があることから総務課防災担当が企画をして実施した。このような考えが教職員から自発的に出てきたことはとても意義あることであり、次年度以降も理論だけではなく実際に教職員がどう取り組むかの視点は大切にしていきたい。



⑤ 生徒地区会の活性化（4月・10月・11月）

<令和3年4月8日 第1回生徒地区会>

今年は教職員だけではなく、生徒に防災について主体的に取り組んでもらうために、生徒会会則にある通学生徒会（生徒地区会）を活用するようにした。昨年度までは4月に生徒地区会を実施し、代表生徒を選出したが、年間を通して特筆するような役割はなかったため、今年は様々な場面で活躍することを伝えた。

<令和3年10月8日 オンラインプログラムでの東日本大震災についての遠隔授業>

10月に静岡県教育委員会健康体育課から御紹介いただいた「オンラインプログラムによる東日本大震災についての遠隔授業」を岩手県釜石市にある、いのちをつなぐ未来館川崎杏樹様から、東日本大震災での被害状況、災害発生時の生徒たちの行動、震災前に行われていた防災教育はどのようなものだったのかについての話を聞き、自分たちが被災した際にはどのような行動をすればよいか、防災訓練をどのような心構えで受け、それをどう地区の生徒たちに伝えていけばよいかなどの感想があり、自発的な行動や思考の醸成に大いに役に立った。



生徒地区会の重要性と今後さらに発展的な活動をどうしていくかを、教職員主導ではなく、これから生徒ともに考えていきたい。



⑥ 災害備蓄品の確認と備蓄場所の変更

年度当初、防災備蓄品は、グラウンド東側にある倉庫に保管していた。しかし、有事の際、特に大雨の場合、備蓄品がある倉庫は浸水想定区域にあり、またグラウンドを通過しなければならず、搬入が苦勞することがわかった。また、大規模災害が授業時に起きた場合、帰宅困難者が10月の再調査で54人いることがわかり、災害備蓄品を管理棟2階の倉庫にすべて移動した。

また、学校避難確保計画にも記したが、本校の避難確保機材にある施設内の一時避難用具および衛生器具は以下のとおりである。

水 (425ml) 574本 (2L) 780本 カンパン 574個
アルファ米 874食 サバイバルパン 360個
ルヴァン保存缶 60個 寝袋 20個 毛布 130枚
タオル 50枚 雑巾 500枚 バケツ 50個
洋式便座 (移動用) 6個 マスク 800枚 ゴミ袋 100枚
ビニール手袋 50枚 トイレットペーパー 300個
災害用敷きマット 43枚 等

今後も、ローリングストックを心がけ、1週間程度の備蓄を心がけていく。また、生徒・教職員の帰宅困難者用の寝袋等の数が不足していることもわかり、生徒にとっては自分で寝袋を用意してもらい、学校で保管するなどの対応も必要になると感じた。

⑦ 生徒の防災活動を推進する (生徒地区会以外)

今年もふじのくにジュニア防災士意識啓発コース (シルバーコース) の全校生徒取得および知識行動コース (ゴールドコース) 修了者 44人 (在籍者取得数 127人) の生徒が取得し、防災に対する意識・意欲の向上、地域に根差した教育への実現に向けて取り組んだ。その中で生徒地区会に参加している1年生が「被災地訪問研修」に参加し、2月7日の朝礼で15分間、経験した内容や感じたこと、これから自分たち高校生がどのような行動をとっていくべきかのプレゼンを行ったことは、本校の防災教育が推進してきていることを実感できた。また部活動においても地域研究部ボランティア班が1月27日にJRCオンライン語り部LIVE 2021に参加し、日赤宮城県支部と山口県の萩高等学校、華陵高等学校とをつないで、東日本大震災を体験した語り部さんから被災地の思い、災害発生時に自分の命をしっかりと守ることが



できるためのお話を聞き、県をまたいだ他校の生徒さんと一緒に気づき、考えを深め共有しあうことができ、それを部活動だけにとどまらず、全校生徒に広げられたことはとても良かったと思う。こういう活動が自発的に生徒や教員の力で企画・運営されていることに大きな意義があると感じた。



⑧ 教職員の防災意識を高めるため、実践的な体験ができる機会の充実を図る。

＜危機管理マニュアルと防災計画を職員会議で読み合わせる。＞

危機管理マニュアルと防災計画は5月末日までに全職員に配布し、目を通してもらうようにしている。しかし、有事が起こらない限りページをめくり自分の役割分担が何かを把握する時間を設けていなかったのが昨年度までの実情である。



今年は2学期最初の職員会議後の分掌会議で各課（科）長を中心に、危機管理マニュアルと防災計画を読み合わせしてもらい、担当場所の課題・改善提案を行った。



課題の中には、

業務内容の範囲はどこまでやればよいのかわからない。

テントは学校にある2張をどこに設置すれば良いのか。

災害用機材が、どこに何があるのかわからない。

課の職員で緊急時学校への参集が可能なのが1人であり、防災対応ができるかが不安

遺族対応をどこまでやるのか

があげられた。なかなか具体的に誰がどこまでやるのかについては、その時々全職員体制で有事にあたらなければならないが、今回出された課題については、各分掌長を中心に管理職と相談しながら事に当たっていく必要がある。また年度末の人事異動で担当場所や分掌長が変わることもあるので、毎年早い時期に見直しをしていくことが必要である。



＜チーム研修で防災トイレを教職員と生徒で作成＞

1月12日（水）に教職員キャリアアップ研修の一環で、生徒会執行部の生徒と教職員とで、防災トイレを作成した。このような企画が行われた背景には、2年間、防災教育推進校として、防災教育に力を入れてきた成果である。生徒たちと教職員が一緒に、楽しく防災トイレ作りに取り組んだ。今後生徒と教職員が一緒に防災教育に取り組み、ともに考え行動していくことが大切となってくる。



（5）研究成果、次年度以降の展開

＜研究の成果＞

① 生徒・教職員の防災意識の高まり

防災教育研究の取組の最も大きな成果は、教職員、生徒共に防災に対する意識が高まり、自発的に行動する資質が醸成されたことである。この2年間で生徒地区会を活性化させ、地区リーダーとしての役割を示すことができたことは本校の教育目標である「校訓「自主・友情・進取」のもと、地域を担う有為な人材育成を目指すとともに、生徒個々の自主性を重んじ、敬愛と協力の心を醸成し、進取の精神であらゆることに除く態度を育成する」ことへ大いに貢献することができた。また、教職員が自発的にまた主体的に防災教育について考え、総務課防災担当が緊急時救助袋に関する研修会を立ち上げ企画・運営したこと、地域研究部のボランティア班が他県の生徒と一緒にオンラインで東日本大震災について考え、共有できる企画を行ったこと、経年研修の一環であるチーム研修で担当教員が若手職員と生徒会執行部と一緒に防災トイレを作成し、教職員と生徒が一緒になって防災について考え、行動できたことは大きな成果であった。

② ジュニア防災士全生徒取得の取組と清水町との連携

研究主題である「ジュニア防災士全生徒取得」については、この2年間ですべての生徒が意識・啓発コース（シルバーコース）を取得することができ、当初の目標を達成することができた。本校の教育目標の一つに「外郭団体や地域社会との連携を深め、地域貢献に寄与し、地域社会から信頼される学校」となっている。これはビジネスに関する連携だけではなく、防災活動による地域連携も含まれている。本校に通う生徒は、卒業後地元就職する者が半数、進学した半数も地元に戻ってくる者が多いため、将来地域での防災の担い手として活躍することが期待されている。そのため、自分の命を守ること、家庭での防災リーダーとして大切な人の命と地域の人々の命を守ることなど、地域防災力の向上が期待できる「ジュニア防災士」を活用しながら全生徒の人材育成ができ

たことは、学校目標を具現化する上でも大きな成果であった。

昨年度は避難所開設訓練を行い、地域の方々の声や、学校の防災教育についての考え方や実践等を理解していただく場があり、連携がうまくいったが、今年度は新型コロナウイルス感染防止の視点から、連携をする機会がなくなり、せっかくジュニア防災士の知識行動コース（ゴールドコース）を取得した生徒が、地区の防災訓練や、清水町との防災協議に参加させるなど学んだことを活用する場や未知の状況にも対応できる思考力、判断力、自分たちの考えを発言できる表現力の学びの機会を失ったことはとても残念であった。生徒地区会が活性化してきた中で、今後は地区の防災訓練にどう参画していくか、高校生としてどう地区防災に参画し、自分の命、大切な人の命を守るために何ができるかを考え、行動させていきたい。

③ 実践的な危機管理マニュアルの作成と検証

毎年、危機管理マニュアル、防災計画を作成し、昨年度、学校避難確保計画を清水町に提出した。清水町には年度当初提出をし、内容を確認してもらっているが、今年度教職員に危機管理マニュアル、防災計画を分掌ごとに読み合わせ、課題と改善点を協議していただいたことは大変有意義であり、毎年確認し、見直す必要があると痛感した。

11月に実施された学校防災担当者研修会で指摘された危機管理マニュアルチェックシートで指摘された事項を来年度に向けて、現在修正中である。マニュアルや計画は一度立てたら終わりではなく、毎年見直しをする必要がある。今後は校内の防災組織をより実効性の高いものとするために、年に1・2回職員で協議する機会をつくること、生徒地区会をより防災意識の向上と、実践的な活動ができるように、マニュアル等を作成・検証していく。

<次年度以降に向けて>

① 生徒地区会の活性化

生徒の防災に対する意識の向上や主体的な行動をより活性化するため、生徒地区会の定期的な開催と防災リーダーとしての役割を果たせるよう、講演会やリーダー研修へ積極的に参加させる。そして朝礼等を使ってその成果を発表させる仕組みをつくる。

② ふじのくにジュニア防災士の継続的な取得と活用場面の設定

次年度以降もふじのくにジュニア防災士に参加し、全生徒が意識啓発コースの認定を受ける。そして知識行動コースに参加し認定された生徒が、学んだことを活かすことができる地域防災訓練や清水町との防災連絡会議に参加し地域に貢献できる生徒を育成する。

③ 教職員の防災情報の共有と改善

教職員が毎年、危機管理マニュアル、防災計画、学校避難確保計画を読み合わせる時

間をつくり、課題や改善点を協議する。そしてそこから派生する教職員のアイデアや企画を管理職が後押しする雰囲気醸成する。

④ 防災意識の向上「地域とともに、自分の命を守る、大切な人の命を守る」

防災意識向上の重要性を、生徒・教職員・保護者・地域住民で共有できるように働きかけを継続していく。